

第64回 (通算第147回) : 2013年7月25日 (木)

(座長 : 五十嵐雅子)

社会への鑄造技工技術露出法の一例

大沼誉英 (歯科技工士学科)

平成25年6月に、新潟日報新社屋“メディアシップ”にて高校生や本学資料請求者をはじめとする一般市民を対象とした明倫短期大学学外ガイダンスが行われた。このガイダンスは、「お口の健康」を回復、維持するチーム歯科治療とその一翼を担う歯科技工士のテクニック、さらに歯科技工士を育てる本学歯科技工士学科を紹介することにより、若者には進路開拓チャンス、成人には健康管理の啓発に役立てることを目的として行われた。一般市民に対して歯科医療をより理解していただき、また歯科技工技術の1つである鑄造の技術もより多くの人々に理解していただく良い機会であったことから、埋没から鑄造までの複雑な過程を分かりやすく説明することが可能となるように、段階模型を製作して、それを用いてのデモンストレーションを行った。段階模型は、埋没操作の終了した鑄造用リングを縦方向に切断されており、内部の状況をその断面で確認できる状態になっており、①ワックスパターン埋没後②埋没材の焼却後③鑄造後のステップで製作した。

クラウン等の金属にて製作された歯科補綴装置の製作方法は、患者さんの立場である一般市民の方のみならず、歯科医療従事者である歯科医師や歯科衛生士でも、ほとんど知られていないばかりか、説明の困難な作業工程であり、また理解の難しい部分であった。しかし、今回製作した段階模型を用いてのデモンストレーションによって以下のように感じる事ができた。①埋没から鑄造される過程をステップ毎の断面模型を見ていただくことで、より理解度が増した様に感じられた。②鑄造工程はタブレット端末を使用して画像での説明を行い、溶かした金属を流し込む様子を見ていただいたことで、ワックスから金属に置き換わるまでの過程が分かりやすかった。③ワックスアップ・研磨などの作業工程を直接見ることで歯科技工士の仕事内容がよりイメージしやすくなった。説明用の段階模型があることで、聞き手としてはイメージがしやすく、また作業の流れが理解しやすくなったのではないかと考えられる。

明倫短期大学附属歯科診療所 訪問口腔ケアの実際

小林 梢 (歯科衛生士学科)

明倫短期大学附属歯科診療所の訪問診療の実際について、訪問口腔ケアを行った以下の3症例を報告した。

【症例1】78歳男性。主たる病名：頸椎症性脊髄症。要介護4。介護支援専門員からの紹介。

摂食嚥下機能低下により、胃ろう増設を図り経管栄養になっているが昼のみミキサー食を少量経口摂取している状況。居宅療養管理指導計画を立て、その後、歯科衛生士1人で居宅療養管理指導に出かけ口腔ケアを行っている術式を動画で説明した。

【症例2】37歳女性。主たる病名：頸椎損傷。連携病院歯科からの紹介。

頸部から下は完全麻痺であるが、マンションで独居生活をしている。口腔ケアについては、家族・他職種からの協力は得られないケース。週1回のPTCと、月1回の超音波スケーラーを使ったポケット内クリーニングでカリエス防止と歯周組織の改善がみられている。

【症例3】76歳男性。主たる病名：パーキンソン病。神経内科からの紹介。

嚥下評価の結果、口腔期・咽頭期・食道期レベルに問題があり嚥下の間接的訓練が必要となった。訓練時必要な器具器材と、訓練前の口腔ケアの内容、間接的訓練の内容を説明した。

以上のことから、歯科衛生士は口腔ケアの術者でもあるが、本人・家族・多職種への指導者であり、支援者でなければいけないと考えた。

第65回 (通算第148回) : 2013年9月26日(木)

(座長 : 平澤明美)

歯科衛生過程に基づく歯科介護実習の 取り組み

計良倫子 (歯科衛生士学科)

本学では平成9年より、歯科衛生過程に基づいた、歯科介護実習を実施している。これは、歯科介護の課題分析、問題事項の選定、計画立案、歯科介護の実施、実施評価の5つのプロセスに実習記録を加え

た6つの構成要素から成り立っている。今回、それぞれの過程の実施状況について学生にアンケートを行った。

その結果、歯科介護の課題分析では、項目数の多さから平均30分を要し、問題事項の選定および計画立案ではMDS-HC方式を応用したプロトコールにより10分という短時間で言うことができた。歯科介護の実施では、意思の疎通が図りづらい、要介護度の高い人ほど開口困難等の理由から、20分の時間を要した。実習記録では、決められた時間にまとめて記録を行うことで振り返りの時間がかかり、要した時間は平均20分であった。また、歯科介護全体の感想では、良かった点として、対象者に感謝される、要介護者の口腔内状況がわかるようになる、効果がありやりがいを感じる、コミュニケーション能力が向上するなどが挙げられ、困った点では、対象者の拒否、実施時間の確保、意思疎通の困難な対象者への対応などが挙げられた。

今後は、実習方法や結果に対する評価能力を向上させ、コミュニケーションの難しい対象者に適切な対応ができるように訓練するなどを課題とし、学生に指導していきたい。

介護老人保健施設における 口腔ケアの実践

河野雅之（附属歯科診療所 Dr）

中山 恵（附属歯科診療所 DH）

超高齢社会の到来で、要介護者や障害者に対する口腔ケアの重要性が認識されている。

そこで当診療所の訪問診療先である介護老人保健施設における口腔ケア実施状況の調査、口腔ケアに携わる職員に対しての意識調査を実施し、現状の分析と口腔ケアの問題点を明らかにし、よりよい口腔ケアの実施をする為の検討を行った。

入所者の口腔内の状況、職員へのアンケート結果をもとに口腔ケアに携わっている方への口腔ケアセミナーを行い、口腔ケアの重要性、口腔ケアに使う器具、方法などを理解してもらった。セミナー後入所者の口腔内は以前よりきれいになり、職員の口腔ケアに対するモチベーションも高くなった。

また口腔ケアに必要なタフトブラシや口腔乾燥症の方に必要なコンクールマウスジェルが施設の売場で購入できるようになった。

今後もセミナーなどを開いて多くの人に口腔ケアの重要性、方法を知ってもらい、入所者の方のQOL向上に努めていきたいと思う。

第66回（通算第149回）：2013年10月24日（木）

（座長：飛田 滋）

新しい熱可塑性ポリカーボネート 樹脂RQの研磨性について

佐野裕子（歯科技工士学科）

伊藤圭一（歯科技工士学科）

義歯床用強化ポリカーボネート樹脂SR（以下、SR）は、残留モノマーが溶出しないため、生物学的安全性や生体適合性に優れた歯科材料として長年使用されてきた。しかし、強化材成分の無機質フィラーの影響で、義歯の仕上げに重要な表面光沢を出す研磨性にやや難点があり、研磨作業性の改善が課題となっていた。このほど無機質フィラーを添加することなく、強度や耐疲労性などの力学的特性の向上を図った義歯床用ポリカーボネート樹脂RQ（以下、RQ）が上市された。そこで、新しいポリカーボネート樹脂RQと従来のSRの研磨性を比較する目的で、物理的試験として表面粗さ試験を、実用面から研磨作業性について官能検査を実施し検討した。その結果、表面粗さがRQはSRに比べて平均粗さ、最大粗さがともに約1/3に低下した。研磨作業時間は、RQはSRよりも荒研磨で22%、中仕上げで23%、仕上げで42%それぞれ短縮され、合計研磨時間では29%短縮された。さらに研磨面は滑沢な表面光沢が認められた。以上から、RQはSRの表面仕上がり状態の課題が改善され、研磨作業性が向上した新しい材料と考えられる。

新ポリカーボネート樹脂RQの特徴と 関連材料について

根岸政明（東伸洋行株式会社）

馬場勝也（東伸洋行株式会社）

従来の義歯床用強化ポリカーボネート樹脂では、歯科材料として強度を確保するために強化材を配合していたが、新しい床用樹脂を開発するに当たり、高い耐久性と耐薬品性を有するハイグレードの医療